

今月のことば 平成25年 4月 <No.80>
大切な者の名を呼びあう



平成25年(2013年)3月2日、真光寺前住職 林隆恵が満87歳にて往生の素懐をとげました。そして同月12日、門信徒葬をお勤めさせていただきました。そのとき喪主として、私が挨拶させていただいたことばの一部を抜粋して書かせていただきます。

今年、年明けより食べ物が喉を通らなくなり、点滴を中心とした療養を続けて参りましたが、多発性の脳梗塞も患い、最後は肺炎にて娑婆の縁尽きることとなりました。

三月二日の朝8時36分、子や孫に見守られながらの穏やかな最期でした。

私がグループホームに子供たちを連れて到着したのは、8時30分過ぎでした。「たった今、呼吸が止まりました」とスタッフの方に言われ、部屋へと入りました。その時、誰からともなく「お父さん、お父さん」「おじいちゃん、おじいちゃん」と呼びかける声が起きました。「お父さん…」「おじいちゃん…」何度も何度も呼びかけていると、呼吸が止まったはずの父が、私たちの声に答えるように「は一つ」と、もう一度だけ大きな息をしたのです。

ここで父の臨終の様子を細かくお話するのは、臨終に「間に合う・間に合わない」という話がしたいからではありません。最期の父の姿が教えてくれたのは、大切な者の名前を呼びあうことのあたたかさ、そして尊さでありました。

私には父の最期の一息が、「お父さん」「おじいちゃん」と呼ぶ家族の声に、精一杯「おうっ」と応えてくれたように見えました。泣きながら呼び続ける声に、「ここにおるぞ、ここにおるぞ」と命がけで応える父。その名を呼べば必ず応えてくれる方がいることが、これほどありがたいことか、これほどあたたかいことかと、その身をもって示してくれました。

父の人生は、五十年の住職生活を通じて、「ナマンダブ ナマンダブ」と阿弥陀さまの名を呼び続ける歩みでありました。父が称える「ナマンダブ」の先にはいつも、先にお浄土にお送りした大切な方々がいたのではないかと思います。お父さんやお母さん、若くして戦死したお兄さん、わずかに十歳で亡くした最愛の息子、そして長年連れ添った前坊守が、「おうい、はあい」といつでもお浄土から応えてくれる、その声を聴きながらのあたたかい、そして御恩報謝の歩みであったと思います。

苦勞の多い人生ではありましたが、父のお念仏の声は跡を継いだ住職の私はもちろん、ここにおられる一人一人のご門徒様方のその口にこの口に、受け継がれております。どうぞこの門信徒葬を機縁として、お念仏相続によりいつそう励まれますことを願ひまして、はなはだ楚辞ではございますが、ご挨拶とさせていただきます。

長年、真光寺を守りつづけてくれた前住職に「お疲れさまでした」の思いを、そして父を支え続けてくださった皆さまに感謝の思いをこめて、お念仏申させていただきます。

慧日山 真光寺

